

古代日本の壁画

—高松塚とキトラ古墳—

林 温 / 慶応大学 教授, 日本

日本の古代壁画といえば、法隆寺金堂壁画が最も重要で貴重な遺品であったが、惜しくも火災で大きな損傷を受けた。しかし、この偉大な仏教絵画作品とは性格を異にする壁画を持つ高松塚古墳が1972年に発見され、近年これと極めて密接な関連を有するもうひとつの古墳壁画が発見された。これらの製造時期は、古代日本が政治体制を確立しつつあった7世紀後半から8世紀前期頃の時期に当たり、二つの古墳の被葬者は王族あるいは中央の有力豪族であったと推測される。また、壁画の内容については高句麗あるいは唐の墳墓壁画との関わりが論じられてきた。近時、高句麗古墳壁画が世界遺産に登録され、また中国における唐代壁画墓の発見が相次ぎその研究がめざましい今日、このような研究発表会は真に時宜に適ったものであり、ここに発表の機会を与えられたことは自分にとって大変光栄であり、また日本の古墳壁画を研究する上に非常に有意義であり、関係諸氏に心から感謝申し上げます。

さて、日本で壁画が描かれ始めたのは6世紀からだが、特に唐や朝鮮三国から習得した絵画技術により7世紀後半には高い芸術性を持った壁画が製作されるに至った。その例証が奈良県内にある法隆寺金堂壁画であり、高松塚古墳壁画であり、さらに近年発見されたキトラ古墳壁画である。法隆寺金堂壁画は惜しくも1949年に火災により大きく損傷してしまったが、1972年2月に高松塚古墳壁画が発見され、キトラ古墳は1年ほど前に壁画の存在が確認され、今年になって慎重に発掘とともに保存対策が進められている。

高松塚古墳壁画とキトラ古墳壁画は奈良県飛鳥村に、

2キロメートルの近さに所在する同形式の古墳壁画で、製作時期も半世紀より距たることはない。ともに墓誌など築造時期を示すような文献史料は発掘されず、どちらが先行するかは説が分かれるが、ともに7世紀後半から8世紀前期頃に描かれたと考えられている。

高松塚古墳は径が20メートル弱、高さ4-5メートルあり、墳丘は「版築」と呼ばれる技法によって造営されている。版築とは、大規模な建築物の基壇として堪え得るように、粘土と砂質の混ざった土を10センチ前後敷いてはこれを叩き締める技法をいう。石槨は凝灰岩の切石で構成され、内部は奥行き2.65メートル、幅103.5センチ、高さ113.4センチある。一方、キトラ古墳は同規模の円墳で、石槨の内法は奥行きが2.4メートル、幅1.04メートル、高さ1.13メートルで高松塚古墳と極めて近いが、高松塚と異なって側壁から天井にかけて緩やかなアーチをなしている。

両壁画は画題内容も共通するところが多く、ともに天井に天文図、側壁四方に四神図を表している。相違点は、高松塚古墳壁画にはこの他に男女の群像が描かれているがキトラ古墳壁画には人物図はなく、そのかわりに後者では前者にない十二支像が表されていることである。

さて、両古墳壁画の主題は、もちろん共通する画題、すなわち天井の天文図と側壁の四神及び日月像である。四神は天文図中に表されている二十八宿と密接な関連があり、二十八宿を四方に七宿ずつグループ分けし、それぞれを四神に充てているのである。四神は方位を守護するという以前に、四方の星宿を象徴している存在である。したがって、天井の天文図と日月像及び四神は、天体を表現しているわけであり、それは宇宙あるいは世界の運

行とその統治を主題としているのであり、そのような主題で飾る墓室の被葬者はそれなりの身分の人物であろうと考えられているのである。

中国や高句麗の墓壁でも古くから天体が天井や側壁を飾ってきたが、十二支が明確に描かれた例はない。中国では、例えば北齊時代の婁叡墓(五七〇)等に獸頭人身像が描かれているが、描かれた位置や全体の種類を見ると、これを十二支と見なせるか否か速断しがたい。明らかに十二支を造形化した遺品は隋代以降に現れる。隋唐期(六世紀から八世紀)に中国墓においてはむしろ、十二支は墓碑に動物の姿で線刻されることが多いが、獸頭人身像も塑像あるいは陶像のように立体で表す例がしばしば見出される。一方、後述するように、韓国では統一新羅時代(八世紀から九世紀)の墳墓周囲に獸頭人身の十二支像石彫を廻らせる例がある。

墳墓以外で四神と十二支を組み合わせる構成を採る例として、中国の鏡が挙げられる。既に後漢時代から方格規矩四神鏡の中に十二支の字を有するものが現れる。十二支を動物の姿で表す隋代の遺品がリートベルク美術館(スイス)等に所蔵されており、初唐期の遺品が中国・陝西歴史博物館に所蔵されている。アメリカ歴史博物館(米国 ニューヨーク)蔵四神十二支鏡は五重の同心円に内側から四神、十二支獸、八卦、二十八宿、銘文帯を表しており、特に、四神・十二支獸・二十八宿という構成は、まさしくキトラ古墳壁画と合致する。二十八宿は星座で表示されるが、四神の姿はキトラ古墳像と似ておらず、十二支も獸形である。なお、高松塚古墳壁画四神像と共通性が高い正倉院蔵四神十二支八卦背円鏡は日本で製作された可能性が高いが、十二支はいずれも獸形で表されている。

高松塚におけるような侍従や侍女を表すことは、新城公主墓や章懐太子墓などの唐代墓に多く見られる。中国あるいは高句麗とでは墓の規模が全く異なるが、キトラや高松塚古墳では主要な構成要素のみをコンパクトに纏めた観がある。

簡単に両古墳壁画の内容を紹介する。

天井の天文図は北極星を中心とする北辰とこれを囲む二十八宿からなる。高松塚では北極五星と四輔星を中央に表し、四方に七宿ずつ直線的に配置しているので二十八宿は方形に近い。キトラ古墳壁画の天文図はより本格的なものである。星座は合計六八を数え、金箔による星の数は約三五〇。基本的には三垣と二十八宿、それに高松塚では表されなかった北斗七星を加える。内軌・赤道・黄道・外軌を示す大円を表わすが、黄道が南北中心線に対して東西逆転している。星宿は中国や高句麗の墳墓に先行例が多くあり、本格的な天文図として章懐太子墓に妃の房氏を合葬した際(711年)に描かれたと見られる後室天井が報告されているが損傷が多く、キトラ古墳天井画は最も古い例の一つとして貴重である。

キトラ古墳石室内の天井と側壁の間は折り上げ天井風に斜面があり、この東西面にそれぞれ日像と月像が表されている。高松塚古墳でも東西側壁中央上部に同様の日月像が表されているが、これらは水平線を重ねた雲海の上方に円盤を表し、日像は金盤、月像は銀盤とし、おそらく円内に三足鳥や月兎あるいは蟾蜍を表していた。水平線の間からは数段の突起を描いて遠山を表している。これらの表現は唐代画の影響と見られる。

四神は東方に青竜、南方に朱雀、西方に白虎、北方に玄武をそれぞれ中央に表している。高松塚古墳では南方壁画を失っており、キトラ古墳では青竜の身体部が泥流によって隠されている。玄武は両壁画で酷似し、白虎も向きが反対ではあるが図像はほぼ同様である。

白虎や青竜は、中国北朝墓あるいは高句麗古墳に表されたものよりも、中国南朝の遺品に近似していると思われる。例えば、江蘇省丹陽市建山金家村墓出土の画像磚に表された白虎像(南京博物館)は、南齊(五世紀後半)の遺品とされるが、S字形に曲げる長い首の上に載った頭部を見ると、眼といい鼻といい、小さめの耳と頸端から後方に靡く鬃まで酷似している。さらに、踏ん張る前肢の反り返る形状、両肩部に蕨手状の飾りから派生する羽

毛、身体部の腹と背の模様等まで、形状をよく合致させていることが認められよう。このような特徴は、百済宋山里墓壁の白虎像にも共通しているように思われ、とすればキトラ古墳像の図像の伝来経路を考える上で興味深い。

キトラ古墳の朱雀像は、冠羽と耳のような羽、翼の雨覆の形状、数条の長い尾羽などが特徴である。高句麗の双楹塚後室の朱雀像は、尾羽や腿部の羽毛における斑点模様がキトラ古墳像に近い。また、江西中墓に描かれている朱雀像は雨覆の形や肉垂が近似している。しかし、キトラ古墳像に認められる「耳」(飾り羽?)の類例は、管見では高句麗古墳壁画中に見出せないが、中国唐代の節愍JIEMIN太子墓壁画等の靈鳥に見出すことが出来る。

玄武は、亀とこれに巻き付く蛇が大きな一つの環をなす造形的な特徴があり、蛇は一巻きである。神獸的な表現は少なく、唐代美術の影響を受けた正倉院宝物中における玄武もしくは亀の姿に共通するところが多い。

四神や日月像の表現は中国南朝から唐に至る造形の影響が指摘されるが、キトラ古墳壁画の方が古風である。キトラの四神では白虎が北向きに描かれており、このような例は唐鏡等では殆ど見いだせないが、正倉院蔵四神十二支鏡と共通する。この鏡における青竜・白虎はともに尾を後肢の下をくぐらせてから立たせているが、この点は高松塚古墳およびキトラ古墳におけるものと共通しており、鏡自体も日本製と考えられている。

高松塚古墳壁画の人物像は、7世紀後半期の藤原京出土木簡落書きや、中宮寺蔵天寿国續帳に類似例があり、同時代の日本人風俗を伝えると考えられるが、その表現には唐代絵画の影響が強く、私見では8世紀に入ってからのものである。例えば、東壁男性の横顔など唐代の7世紀末から8世紀初期頃の墓壁画に類し、西壁女子の裳に描かれた横向きの皺の表現は、唐の韋★Jiong墓や薛★XuiJing墓の石刻画に認められる。ただし、高松塚古墳人物の服装は唐墓壁画に見られるものと異なり、むしろ

高句麗古墳壁画に連なるものである。

キトラ古墳壁画の十二支像では寅像のみが完全な姿を確認できるが、その姿は虎の頭部を持った人物表現であり、唐代の墓誌におけるような動物表現とは異なる。また、隋唐の墓から発見されているような文官風ではなく手に鉞のような武器を持っている。この点は、韓国慶州の墓陵周囲に廻らされた浮彫十二支将像に近いが、それらは8世紀半ば以降とされている。

以上、画題の内容とその表現様式から見ると、キトラ古墳は十二支の存在から、高松塚古墳は男女群像の表現から、それぞれ朝鮮半島では高句麗古墳から統一新羅王朝に至る間、中国では初唐から盛唐前期のころに対応すると思われる。これまで、高松塚古墳壁画については高句麗古墳あるいは唐代墓の壁画からの影響関係が喧しく論じられてきたが、8世紀初頭頃には朝鮮半島からのみでなく直接中国から文物が輸入されており、複合的に考察されるべきであろう。

最後に絵画技法について触れておく。

両古墳共に、凝灰岩の表面に炭酸カルシウム(石灰)を薄く塗って下地とし、下図を写してから着色している。キトラ古墳では下図を壁面に当てて、上から先の尖った筥か角筆のようなもので線をなぞって下地に写したことが分かっている。これは法隆寺金堂壁画において用いられた技法であるが、高松塚古墳壁画ではそのような刻線が見いだされていない。とはいえ、中国唐代の永泰公主墓に認められるようなラフなデッサンを重ねた下描線のようなものも見られず、やはり予め用意した下図をなんらかの方法で写し取ったものと思われる。また、高松塚古墳壁画の方のみ、炭酸カルシウムの他に鉛分が検知され、絵画部分ほどその数値が高いので、下地として鉛白を塗っていたことが推測される。

白色下地の上に図柄を淡墨線で象り、その上に彩色し、最後にやや濃い墨線で仕上げるのが原則である。天井の星は金箔を貼り、朱線でつないで星座を形作る。キトラ

古墳の場合はコンパスを用いて円を描いており、高松塚古墳では定規を用いて直線を引いている。

高松塚古墳壁画の場合、緑と青は(孔雀石と藍銅鉱—塩基性炭酸銅)、黄色は酸化鉄、赤は硫化水銀ともう1種類などで、金と銀も使用されている。近時、青にラピスラズリが使用された可能性が示唆されたが、その論拠に疑問が出されてもいる。キトラ古墳壁画でもほぼ同様と思われるが、未だ顔料検査は実施されていない。